



TITLE:

京大広報 No. 424

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 424. 京大広報 1992, 424: 247-254

ISSUE DATE:

1992-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209234>

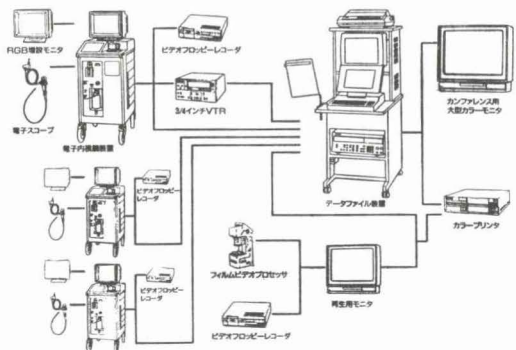
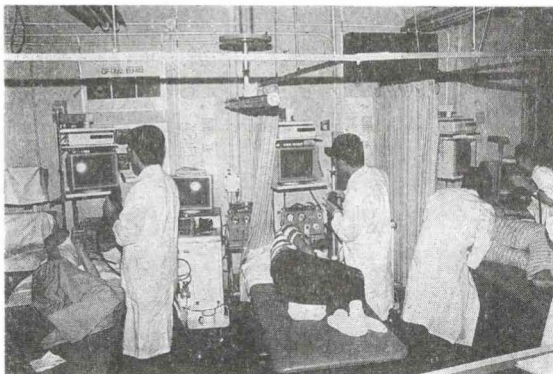
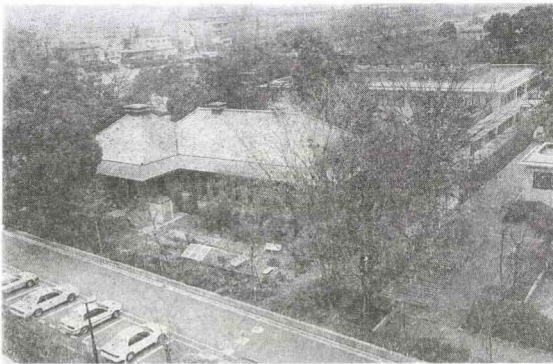
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 424

京都大学広報委員会



医学部附属病院デイ・ケア診療部全景（写真左上）、デイ・ケア診療部作業室（写真右上）、同光学医療診療部検査風景（写真左下）及び同光学医療診療部の内視鏡検査機器と記録・保存装置の構成（写真右下）
—関連記事本文 248 ページ—

目 次

<紹介>

医学部附属病院

—デイ・ケア診療部，光学医療診療部— 248

計 報 249

<資料>

平成3年度教育研究学内特別経費による

研究課題 250

平成3年度教育実習状況 251

<随想>

名誉教授の利用の仕方

名誉教授 市川 康夫 253

<コラム>

ドーピング

体育指導センター助教授 井街 悠 254

＜紹介＞

医学部附属病院

—デイ・ケア診療部, 光学医療診療部—

デイ・ケア診療部

国立大学病院としては、はじめての精神科デイ・ケア診療部は、附属病院の中央診療部の一部局として、平成元年度に開設された。

平成2年5月には、健康保険の適用施設としての認可も得られ、本格的な活動を開始した。

昨年暮れに国連総会で採択された、「精神病者の保護及びメンタルヘルスケア改善の為の原則」は、精神病患者への差別の禁止とともに、「全ての患者は、出来る限り自分の居住する地域で治療を受け、ケアされる権利を有する」と謳っている。

昭和63年に改正された精神保健法も、入院に際しては、本人の同意を得るように努めなければならないと、病院管理者に義務を負わせるとともに、生活の場での治療の推進を謳っている。

精神病患者は鍵と鉄格子の病院に入れられるとの「常識」は、日本の精神病床を全病院病床の1/4を占めるほどに増大させたが、多くの人々の努力によって、流れは大きく変わってきた。

入院は、やむを得ぬ事情がある時に、本人の同意を得て採られる手段となり、可能な限り外来医療が目指されることとなった。

精神科デイ・ケアは、家で寝泊まりが出来る状態の患者に、入院と同程度の治療を行うことができる施設として、工夫されてきている。

入院が、家庭・社会生活から患者を切り離し、何らかの強制性を禁じえないのに比し、デイ・ケアでは、通常家庭生活は維持され、通所も本人の自由意思に任されている。

精神科の治療構造が根本的に変わったのである。

それは、スタッフについても云える。本学ではまだケースワーカーが採用されていないが、作業療法士・臨床心理士と看護師と医師が、それぞれの専門性を活かしながら、仕事を分担している。各専門職であるよりも、デイ・ケアのスタッフの一員となることが求められる、チーム医療のモデルの場でもある。

治療の場としては、受容的雰囲気のもとに、精神科医療にとって最も大切な「安心感」の提供が目指される。「自分が居てもよい場所」との安心感は、自信や自律性を再獲得する基盤となる。

次に集団精神療法的な配慮のもとでの様々な集団活動は、他者との交流・共感・共同作業を通して、自他を見、自信や自律性を取り戻し、病を克服してゆく機会を与える。

精神科リハビリテーションの目標は、自らの弱点（脆さ）を少なくし、脆さが露呈しかねない時の対処の仕方を身につけ、自らの現状に適した社会活動の場を得ることが出来るように援助することである。デイ・ケア診療部は、リハビリの最先端として、大いに期待されている。

陶芸・手工芸・レクリエーション・スポーツ・園芸や料理等、ゆとりを大切にしながら、多彩なプログラムの中で、今日も通所者の笑声が聞こえる。

光学医療診療部

馴染みのない名称であろう。耳で聞くと「高額・・・」と誤解されやすい。消化器の内視鏡に関連した分野を担当している。

消化器に関連した症状は頻度が高く、検診も広く行われているので、胃カメラの部門といえばかりやすい。従来は病院の検査部に所属していたが平成3年度に新しく独立・設置された。

大学病院は教育、臨床、研究のいずれについても努力が要求される。内視鏡が光学的な機器であった頃は診断技術の伝達に困難があったが、電子機器となった現在では容易となった。電子内視鏡が導入され、検査中に患者さんもテレビ画面にて自分の胃の中を見ることができ、好評である。

画像情報がデジタル信号にて得られるため、カラーフィルムの現像が不要となった。検査中にも必要な所見はプリントされ、初診の患者でも1時間後には診断結果が主治医の許へ届けられる。

デジタル信号なのでコンピュータ処理による画像解析も可能である。研究室で、民間との共同研究で、種々のソフトを開発している。

消化管の内腔を観察し、撮影・記録するだけの時代は終わった。内視鏡には2mm前後の太さの道具を通すチャンネルがある。先端に注射針、高周波メス、圧力センサーなどを装着した道具、異物を掴みやすくしたもの、レーザー光を通すものなど種々の道具が開発されている。

レーザー光や高周波によるエネルギーを利用してポリープを根元で切開したり、微小癌では粘膜下に注射して盛り上がりを作って切り取ってしまう。大出血している潰瘍でも出血している血管を熱凝固により止血してしまう。食道静脈瘤では血

管内に凝固物質を注射して、従来の外科手術より安全に治療できる。胆石症の大部分も内視鏡治療の守備範囲に入ってきた。

管腔を観るために可視光線を使用していたが、最近では近赤外線、単波長であるレーザー光なども使用されている。癌組織にレーザー光を照射すると微弱な蛍光が発生することが知られており、診断に応用することも試験的に行われている。

内視鏡の先端に超音波検査装置をつけ、体外からではわからない微細な病変の診断、病態の研究に利用されている。検査の手段であった内視鏡が治療、病態研究の手段となったため、光学医療診療部が検査部から独立した。国立大学でははじめて設置されたものである。多彩な研究基盤を有する京都大学において発展が期待されている。広く学内からご援助とアドバイスを願います。

(医学部附属病院)

計 報

川田 万利 文部技官

文部技官 川田^{かずとし}万利氏は、さる2月11日逝去された。享年57。

同氏は、昭和28年本学医学部附属病院歯科口腔外科技工室に就職以来、38年余りの永きにわたり歯科技工士として医療業務一筋に尽力され、その卓越した高度な技術は高く評価されてきた。昭和62年には京都大学永年勤続者表彰(30年勤続)を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部附属病院)

沼 正 作 医学部教授

本学部分子遺伝学講座及び医化学第二講座教授 沼 正作 先生は、2月15日逝去された。享年63。

先生は、昭和27年京都大学医学部医学科を卒業され、京都大学医学部内科学教室を経て、同31年米国ハーバード大学医学部、同33年西独マックス・プランク細胞化学研究所に留学、同43年本学医学部医化学第二講座教授に就任、同60年分子医学系専攻分子遺伝学講座教授となった。

先生の業績及び社会における活動等については、米国科学アカデミー外国人会員に選ばれたこと及び文化功労者に選ばれたことを報じた記事

(「京大広報」№412, 1991.6.15及び№418, 1991.11.15)を参照されたい。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部)

青山 秀夫 名誉教授

本学名誉教授 青山秀夫先生は、2月16日逝去された。享年81。

先生は、昭和7年京都帝国大学経済学部卒業後、京都帝国大学経済学部助手、同助教授を経て、昭和21年経済学部教授に就任、昭和41年から経済研究所教授に配置換え、同48年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。昭和59年には日本学士院会員に選ばれた。

この間、学内においては京都大学評議員、経済学部長、経済研究所長を歴任、京都大学の管理運営に貢献された。学外においても、学術奨励審議会専門委員、経済審議会委員、国民生活審議会委員、外務公務員採用上級試験委員、司法試験考査委員など各種委員を歴任、一方、学会活動においても昭和46年から理論・計量経済学会長に就任されるなど、学術と社会の発展に尽力された。

本学退官後、昭和48年関西学院大学社会学部教授に就任、同57年からは摂南大学経営情報学部長を務められ、両大学における研究・教育の発展に寄与された。

先生は、わが国における近代経済学の理論的、実証的研究の推進と発展のために多大の貢献をされた。研究の主要領域は、統計学と経済変動論である。その第一は、不完全競争の理論及び景気変動論の体系的研究で、その研究成果は主著『独占の経済理論』『経済変動理論の研究』などで公にされた。第二は、一般均衡論のミクロ分析とマクロ経済学の総合で、『経済理論の一般的基礎』『日本経済と経済変動』等の著書に代表される。第三は、近代社会の基礎構造に関する経済社会学的研究で、『マックス・ウェーバーの社会理論』『マックス・ウェーバー』等の著書として発表された。これらの数多くの研究業績は、現在わが国が近代経済学の水準において世界をリードするに至る礎石となったばかりでなく、経済社会学の分野にも視座を広げられた先駆的なものである。

これらの研究業績、学術上の貢献に対して、昭和57年に勲二等旭日重光章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(経済研究所)

<資 料>

平成3年度教育研究学内特別経費による研究課題

本年度の教育研究学内特別経費による研究題目及び代表者は、次のとおりである。

題 目	代表者 所属・職・氏名	参 加 者 所 属 部 局
21世紀の文学部像—教育研究体制を中心に—	文 学 部 教授 中川 久定	文
京都大学所蔵の朝廷・公家関係史料の研究	文 学 部 教授 大山 喬平	文, 法, 教養, 人文研
大学入試制度の社会的効果及び高校教育をふまえた大学入試のあり方に関する総合的研究	教育 学 部 教授 柴野 昌山	教育, 文, 教養
転換期にある法学・政治学教育と国家試験制度	法 学 部 教授 奥田 昌道	法
東・東南アジアにおける技術・資本・知識の生産と移転の構造特性	経 済 学 部 教授 渡邊 尚	経済, 文, 農, 東南, 人文研, 経済研
電気重力の研究	理 学 部 助教授 石沢 俊亮	理, 化研
病理・法医分野でのカラー画像資料の開発収集と教育研究への応用	医 学 部 教授 日合 弘	医, 病院
関連講座間の相互協力による免疫学の教育と研究の整備振興	医 学 部 助教授 増田 徹	医, 理, 薬
生体肝移植の推進と遺伝子レベルでの組織適合性検査法の臨床的検討	病 院 教授 小澤 和恵	病, 放生研
膜作動性ペプチドと生体膜との相互作用	薬 学 部 教授 宮嶋孝一郎	薬, 工
博士(後期)課程の充実とその教育・研究の在り方に関する調査研究	工 学 部 教授 東村 敏延	工, 化研, 防災研
ヒト臓器保存モデルとしての動物臓器の凍結保存法の開発	農 学 部 教授 宮本 元	農, 医
森林及び樹木の立体的計測とその生態学的分析に関する研究	演 習 林 教授 和田 茂彦	演, 農
科学技術の進展と地球圏・生物圏環境との関わりの体系的・方法論的研究	人間・環境学研究科 教授 松本 澄	人間, 文, 法, 理, 工, 農, 教養
環境問題と人間社会の関係に関する教育・研究組織について	人間・環境学研究科 教授 竹市 明弘	人間, 教養
二十一世紀における人間像と自然像	教 養 部 教授 小川 侃	教養, 文
国際変動期の学術交流	教 養 部 教授 鳴原 眞一	教養, 文, 教育, 法, 経済, 医, 病, 東南, 化研, 食研, 人文研, ウイルス研, 数研
大学における放射性同位元素等取扱者の教育訓練方法の検討と教材の試作	放射性同位元素総合センター 教授 栗原 紀夫	放同セ, 医
大学の排水についての環境教育教材作成	環境保全センター センター長 東村 敏延	環境, 施設部
熱帯アフリカにおける内発的発展の学際的研究	アフリカ地域研究センター 教授 田中 二郎	アフリカ, 文, 経済, 農, 教養, 東南
学部学生を対象とした遺伝子工学的手法の実習ならびに安全教育法の検討	遺伝子実験施設 施設長 本庶 佑	遺伝子, 理, 医, ウイルス研

題 目	代表者 所属・職・氏名	参 加 者 所 属 部 局
京都大学における生体力学教育・研究組織の創出に関する調査研究	生体医療工学研究センター 教 授 筏 義人	生体研, 医, 工, 化研, 胸部研
国指定天然記念物「深泥池生物群集」の保護に関する総合的研究(継続)	生態学研究センター 助教授 田端 英雄	生態研, 理, 農, 教養
野外生物の炭素・窒素安定同位体 (CN/SI) フィンガープリントに関する総合的研究	生態学研究センター 教 授 和田英太郎	生態研, 理, 農
東南アジア地域研究と研究者育成	東南アジア研究センター 教 授 矢野 暢	東南, 文, 教養, アフリカ
老化に伴う生体防御能の変化に関する研究	医療技術短期大学部 教 授 笹田 昌孝	医短大, 医, 原子炉
粒子ビーム技術の医療への応用に関する基礎開発研究	化学研究所 教 授 井上 信	化研, 原子炉
生体膜の形態を制御する蛋白質の構造と作用機序	胸部疾患研究所 教 授 鈴木 康弘	胸部研, 理
都市災害の変貌とその構造分析に関する研究体制	防災研究所 教 授 亀田 弘行	防災研, 理, 工, 経済研
可溶性受容体測定法の開発とその臨床診断への応用に関する研究	ウイルス研究所 教 授 内山 卓	ウイルス研, 医, 胸部研
組織の構造と進化のゲーム分析	経済研究所 教 授 今井 晴雄	経済研, 経済, 理, 工
重イオン反応と熱い原子核	基礎物理学研究所 助教授 阿部 恭久	基礎研, 理
低速陽電子の大量発生に関する開発研究	原子炉実験所 教 授 前田 豊	原子炉, 工, 教養
大脳新皮質の発達のメカニズム	霊長類研究所 教 授 久保田 競	霊長研, 文, 教育, 医, 教養
京都大学における教育課程の在り方等に関する諸課題の検討	教育課程等特別委員会委員長 農学部教授 久馬 一剛	文, 教育, 法, 経済, 理, 医, 薬, 工, 農, 教養, アフリカ, 化研, 人文研, 食研, 庶務

平成 3 年度教育実習実施状況

本年度の教育実習は42都道府県の各国公私立高等学校144校, 中学校36校, 養護学校3校の協力を得て実施した。

1. 学部別の履修状況

区 分	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	農学部	計
参加申込者	人 78(3)	人 24	人 14	人 11(1)	人 73 ^[1]	人	人 4	人 31 ^[2] (2)	人 47(6)	人 282 ^[3] (12)
取り止めた者	4	3	1		4 ^[1]			2	5(2)	19 ^[1] (2)
実習終了者	74(3)	21	13	11(1)	69 ^[0]		4	29 ^[2] (2)	42(4)	263 ^[2] (10)

(注) 右肩上の〔〕は聴講生数, () は大学院生数でいずれも内数。

2. 実習を行った学校

学 部 区 分		文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	農学部	計
京都市配当	市立中・高校	1人	1人	人	人	1人	人	1人	人	1人	5人
	市立養護学校		4								4
	取り止めた者										
	実習終了者	1	5			1		1		1	9
出身校	出身中・高校	77	19	14	11	72		3	31	46	273
	取り止めた者	4	3	1		4			2	5	19
	実習終了者	73	16	13	11	68		3	29	41	254

3. 教科別、校種別実施状況

学 部 区 分		文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	薬学部	工学部	農学部	計
国語	中学校	2人	2人	人	人	人	人	人	人	人	4人
	高等学校	10	2								12
英語	中学校	3			1						4
	高等学校	17	7	1							25
社会	中学校	3	2	3	2					2	12
	高等学校	36	2	9	7					1	55
美術	中学校										
	高等学校	1									1
理科	中学校					3		1	2	10	16
	高等学校	2			1	38		3	14	28	86
数学	中学校		1			2			1		4
	高等学校					26			12	1	39
計	中学校	8	5	3	3	5		1	3	12	40
	高等学校	66	11	10	8	64		3	26	30	218
養護学校			5								5
合 計		74	21	13	11	69		4	29	42	263

(教職教育委員会)

